

## 安楽寺ゆかりの阿弥陀如来像

筑紫野市天山の浄土宗西方寺には、安楽寺(太宰府天満宮)と関連の深い阿弥陀如来像がいまも遺されています。

この仏像の縁起によると、もとは小松重盛(平清盛の息子)の守り本尊で、安徳天皇の大宰府落ちの際に天山の地に残されたものとされます。時代は下り、永和元(1375)年春、大宰府を本拠とした武士、少貳冬資の侍が、天神山の木を切るという事件が起きました。安楽寺社家大鳥居氏の侍がこれを打ち捕ったところ、少貳氏の大群が打ち寄せて、大鳥居氏の当時の当主信弁は殺害され、その息子亀松丸は乳母の尼公の懷に隠れて輿に乗り、筑後国の水田(現筑後市、水田天満宮がある)へ落ち延びたのでした。途中、少貳氏の追手を逃れて亀松丸が天山に隠れた際、乳母の尼公が天神に一命を助けよと願ったところ、この像は光を放ちだし、異類異形のものが現れ、敵は逃げ去ります。その後、本像は水田に遷され、大鳥居氏代々の守り本尊となったということです。



この事件については、大鳥居氏の家伝や明治期の地誌にも記されるのですが、同時代の他の史料には窺うことができませぬ。ただ次のような事件が近い時代の史料に見えます。

延文4(1359)年正月、執当法眼(執行坊か)信政の坊人が光明院(光明寺のことか)の山に入って木を切ろうとしたところ、大鳥居氏の坊人に見咎められて争いとなり、ついに殺されてしまいました。怒った社家たちは大鳥居氏のもとに押し寄せ、そのため大鳥居氏はみな大宰府を退去しました。

大鳥居氏と争う相手は異なりますが、山の木を切ったことが事件の発端となったこと、大鳥居氏が大宰府を出て水田へ移る契機となっていることなど、先にみた縁起の記述とは見逃せない一致点があります。あるいは実際の事件をもとに物語を創作して縁起を記したものかもしれません。